

彼の国の人々の何とも暖かい心 XT2AEF

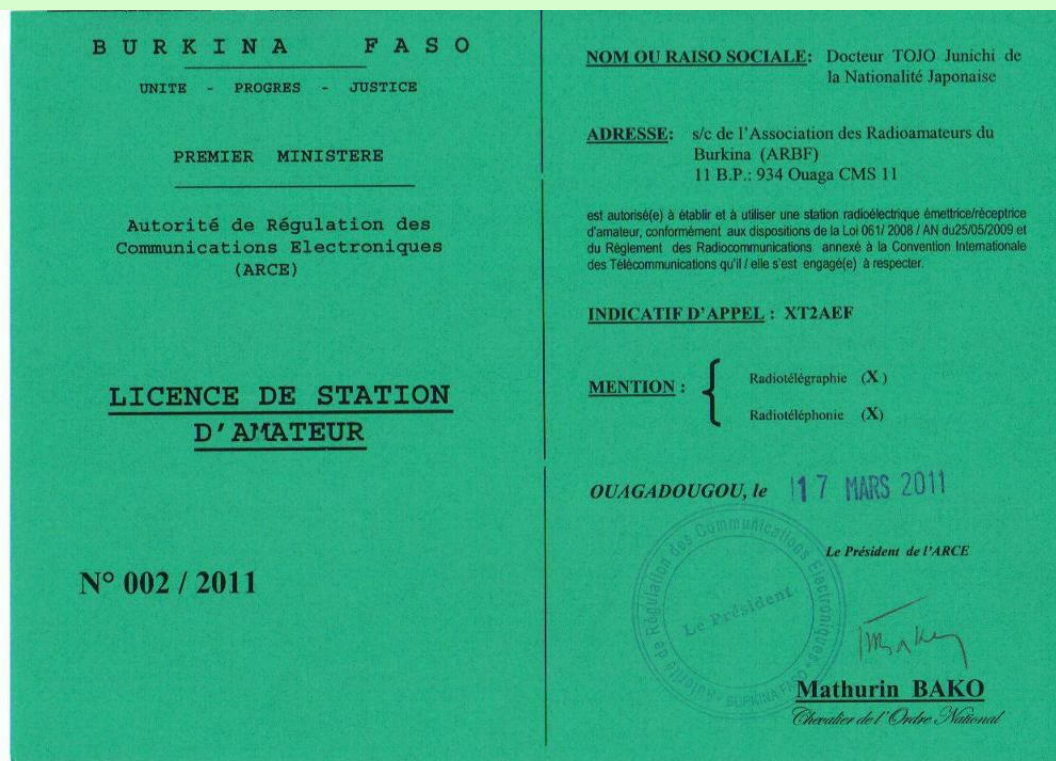
JH3AEF 東條 純一

昨夜の銃撃戦は全て解決、とこの国の政府は発表したということだ。しかし、我々の常識からすれば、判りました、と素直に安心していられる状態ではない。我々の拠点となるホテルはより安全なものに、そして日本大使館へも労せずして逃げ込める距離に移動しておこうとしたのは至極当然の判断だ。ただこのハッピングのために想定外の時間を費やしてしまった。シャック設営のための時間ができたのは23日の午後3時過ぎになっていた。

なるほど事のはかどからはそうだったが、シャック設営をどこで、どのように進めるのか、ましてや運用がどのような形で何時から可能なのかは全く闇の中だった。ただ、調達したランクル内は各自の機材が詰め込まれたトランクやHFのアンテナパーツ、ポール等で扉を閉めるのも窮屈なありさまだった。

さてここで、かねて連絡をとって来た同国アマ無線連盟会長のPoodaさんの指示どうし、準備万端整った件を連絡した。しばらくすると2mと思しきアンテナをトランクに立てた乗用車がやってきた。真っ黒で190cmは悠にあらうと思われる青年が茶封筒を手にニコニコしながら降りてきて差し出した。何だろうと開けてびっくり、緑色二つ折りの従事者免許証である。そこにはXT2その後各人のJAのサフィックスと氏名がしっかり記入されている。(Fig 1)

わー、これでとにかくこの国から波を出すことはできる。だんだん気持ちが高揚してくるのを覚える。我々の間では、「あの、電監のひと？」さっぱり判らないまま突っ立っていると、青年はスタスタと自分の車に向かい、手招きで付いて来いといっている。身動きもできず、後方の視界も全く利かないランクルがその後を必死で追いかける。乗っている我々も彼の車を目で追うのがやっただ。と、車は幹線からそれ、もうちょっと土ぼこりをあげながら曲がり角を二度三度とまがる。恐らく空港と市街地の間に位置する住宅街なのである。しっかりした塀に囲まれ、緑の木々の配された土地が並ぶ一角で若者の車は停車した。



< Fig. 1 >

とにかく砂埃っぽい。車も、木々の枝葉も、建物も、塀もあらゆるものがうすらと細かい砂埃に覆われている。もちろん路面も一面、茶色の細かい砂とも土ともつかぬ状態だ。大雨でも降れば、強い風でも吹けばとあらぬ心配が脳裏をかすめる。あたりは以外に静かで人が行き来する様子に乏しい。暑いからか。塀は背丈より高く堅固なもので、その一角には車が充分出入りできる鉄扉があった。塀には番地を示すのであろう数字が配されている。ベルを押す。何の返答もない。彼の犬、携帯をかける。ようやくくぐり戸が開きスラットした背の高い女性が顔を出す。委細心得たどばかり、我々を内部へと案内する。立ち居振る舞いからみると、この大男さん、電監のお役人ではなく、Poodaさんの会社の人らしい、女性もそのようだ。塀は四方を囲んでいるが200坪はあるのか。キョウチクトウに似た細く濃い緑の葉の茂る植木など敷地を取り巻くように配され、中央に平屋石造りの家屋(Fig 2)、庭の片隅には萱と思しき植物で葺いた屋根のある吹き抜けが、そして平屋の上にはPoodaさんがかねてから言って来たタワーが建っている(Fig 3)。もう一台、庭先にランクルが止めてある。それが庭の利用に何ら不都合を与えないということこの宅地の広さを想像できよう。どう見ても住居だ、それも当地とすれば相当高級な。かってどなたかの生活が営まれていた？ Poodaさんが、、、リビング？ ラウンジ？ があり、キッチンがあり、ガスが使える、充分とはいえないが水道が出る、トイレにシャワーまである。奥にはそれと見てわかるシャック向きの部屋がある。まだその奥にも部屋はあるようだ。シャックには大きなテーブルもあり、仮眠用のベットまで。これだけあれば何の不足もない。電源はとあたってみるに当然のことながら200V。ところがこの電源に振り回されることになるなど、この時点で誰が想像したであろうか。

舞台は上々、各自持ち込んだトランクを開き、Rig一切をテーブル上に並べ結線するのみ。ラウンジは車から降ろされたトランクや機材で一瞬にして足の踏み場もないくらいにひっくり返った。誰が言うでもなく皆もくと荷をほどき、機材を庭に持ち出すやら、シャックに運び込むやら。初対面の女性、挨拶もそこそこに、あっけに取られてソファに腰を下ろしキョトンとした様子であった。

我々はここでUHFバンドを使って無線LANの実験をする班と、HFでのDX通信をするためにHF関係の用意をする班に分かれて仕事にとりかかった。HF用のアンテナは75m 40mをI.V.に、20mからはミニマルチアンテナのHX52Aを持ち込んだ。I.Vアンテナは給電点を持ち上げるだけで簡単だが、ビームアンテナにてこずった。組み立ては出発前にも



< Fig. 2 >

予行演習をして何ら問題は起こらなかったが、小さいといってもブーム長2.3m、6m超え四本のエレメントを持つアンテナをステーだらけのタワー上に持ち上げるのはこのほか困難をともなった。先に従免を届け、我々をこの場所まで先導してくれた屈強の青年はタワーの仕事が始まるまで、例の萱葺きの吹き抜けの下で談笑していたが、ビームアンテナを持ち上げる時点になってタワーの下に駆け寄ってきて何か盛んに言っている。"Security! Security!"



< Fig. 3 >

何を言っているのか判らずボカんとしていると、安全ベルトをしていないというのだ。「一寸待って！」10分もしないうちに安全ベルトを二本どこからか持ってきて、さっさとタワーに登り、ここで良いかとの手振りである。だがその先が全く進まない。こっちのステーをかわしたら、あっちのエレメントがひっかかり、あっちをかわしたら又こっち。とうとうgive up。ANTを屋根に降ろした時にはエレメントがかなり変形してしまっていた。彼曰く、明日はエレメントをばらしてもって上がりタワー上で組み立てよう。でもなー、タワーの一番っぺんまで持っていけないとステーの問題は解決しないしなー!!!あたりはもうすっかり真っ暗になってしまっていた。

そこへ運転手氏が急ぎ足で駆け込んできた。「市街地の様子がおかしい、とにかくホテルに帰りましょう、今夜は外出しない方が良いでしょう」

さてさて、また暴動騒ぎか！ ということで、この日は結局on air出来ず。夕食にもありつけず、ホテルの部屋でカップラーメンをすすって寝るはめに。この夜は銃声もせず静かに過ぎたようだった。

このホテルは最初のホテルに比べ規模も大きくEUやJAの中堅以上のホテルに比べても何ら遜色はない。丁度国内サッカー大会が開催中とかで、様々なユニフォームを着た選手団が宿泊しているようで非常ににぎやかだ。ここなら安全は第一に確保されるに違いない。ひとまず安心だが困ったことに、ここでも英語はさっぱり通じない。ラーメンの水ひとつ手に入れるにも手振りで一苦労した。

翌日24日も早朝から雲ひとつない。暑くなりそうだ。フロントで外出できる？ と手振りで尋ねるとOKと。暴動は無かったようだ。例によって一時間ほどの朝の散歩を楽しむ。出来るだけ普段着で、帽子とサングラスで素性をごまかそうとするが何となく雰囲気が違うのであろう。何人かに1人はチラチラ振り返って行った。

さて今日こそはビームアンテナを揚げて運用にかからねばという強い気持ちで午前8時にホテルを後にした。皆が気を使わず割には街中は普段と変わりなく活気に満ちている。シャックに着いた時にはすでに昨日の大男さんも、レディーさんも来ていた。今日は他に1人、若手のエンジニアらしき人物も手伝いに来てくれている。(Fig 4) Poodaさんには感謝感激である。以前自分の会社の若い者二人を手伝わせるようなことを言うてくれてはいたが、これほど手回し良くとは思ってもいなかった。一度として会ったことのない我々に、何となく寛大さ、本当に有難い。Poodaさんはまたユーモアもある人で、我々の食事の世話をしてくれている女性についても話してくれていた。二人必要なら二人、もっと若いladyがよければすぐmailをくれよとかも、いや、本当に面白い人。人柄がしのばれる。何の何の、今来てくれている女性、身長はすらっと高く、子顔で髪は短くざっぱりまとめている、目はパッチリとして実に愛らしい顔つき、顔も肢体もふっくらと女性らしく、細身でノースリーブのワンピースを着ているものだから男所帯の我々には何よ先心和む存在である。その上、控えめで何をしても少々恥じらいながらの仕種は、今の日本では失われつつある女性像をこのアフリカの地で見たような気がした。(Fig 5)



< Fig. 4 >



< Fig. 5 >

20mは気に入らないが、それでも他のbandは全て合格。アースもきっちりとり、こんなパサパサの砂地にアース棒を突っ込んで役に立つのかな？ 20mはエレメントの先端がステーに近すぎるのが原因なことは明か、リエアー、THP社 HL550FX、も保護回路が働いて遮断されてしまう MIC gainを絞るなり何なりして対応していくことに。今日は朝からどんどん作業がはかどり11時にはon airを待つばかりの状態にこぎつけた。

ふっと我に帰って、日本でやるfield dayなんかより何十倍も豪華な顔ぞろえだなあ。

さて早速作業にとりかかる。すでに太陽は高く、ギラギラと大地を照らすが、さすが午前中とあって午後からのどうしようもない状況よりはかなり作業効率が良い。現地人二人の応援も得て仕事は楽になったが、ステーの問題が解決したわけではない。

何度かの試行錯誤のうえ、ビームアンテナは欲張らずステーが裾を広げる低い位置に固定することにした。それでもエレメントの先端がステーに近付き過ぎるがどうしようもない。JAからはSP315度だからこちらからは135度。しかしステーの関係でどうしてもJAに向けることが出来ず北による。もちろん回転も不可能だ。それでもはるばる日本から持ち込んだビームアンテナをあげることができたのだから万々歳。I.V.antはアナライザー片手に75m用の先端を少し曲げた程度で容易に張ることができた。タワーの最上部に近いところに75mのI.V.給電点、それからやや下がって40mのI.V.給電点、それから下がること4mほどにビームアンテナのブームと、アンテナ群としてはまとまった形に完成した。

(Fig 6)

シャックの側から夫々のバンドをチェックするに、どのバンドも気に入らない。そんなことはない筈。ステーが影響しているに違いない。一寸方向をずらしてみる。まだおかし。

ええー？ 一体なんでや？？？

屋外に出て同軸をたどってみる。間違っていました！！ よっしゃ。午前といえども40°Cを越す酷暑のもと、間違いもあるは！！ もう一度確認。

さていよいよとシャックに座ったところで気がついた。今日は朝から停電である。こちらでは停電は当たり前。全く無計画と思えるほど何の前ぶれも無く昼夜を問わずやってくる。またそれが何時間続くのか計画性も全く無し。停電のことなどすっかり忘れて作業していたが、やっとon air出来るところまでこぎつけての停電にはがっかりである。おかげで女性を作ってくれたポテトのフライと川魚の煮つけの昼食はゆっくり堪能することができた。海のないこの国の魚、漁が出来るほどの大河はこの砂埃の環境からは想像もつかない。だいたい野菜類が栽培できる環境があるのだろうか？ 等等、あらぬことを考えながら電気を待つこと数時間。2時になっても3時になってもまだ停電。薄情にも程がある。

ようやく電気が来たのは午後遅くなると5時に近くなってからであった。直ちにrig, ampを稼働させる。20mを除き各バンドとも良好な状態を確認。我ながらかなり緊張していることを感じながら夢にまで見たXT2AEF on airの瞬間となった。時刻は3月24日午後4時50分、現地時間はZ timeである。

矢張り先ずJAのことが頭をかすめる。向こうは真夜中、とてもつながる時間帯ではない。信号がちらほら聞こえる17mでCQを、JAに向けたかったビームの向きはどちらかといえばEUに悪くない方向に固定されている。ガッソーと0が、続いて13が、UT4、DM1、UA3、G1、と当然のことながらEU全域からのパイルアップが始まった。待ってました、パイルアップになるのは望むところ。コールサインを何度も聞き返すようでは甘く見られる。神経を集中して敢えてオンフレで押しとす。それにしてもどえらいパイルになったなあ。さっそくDJ9ZBのような大物のコールサインも混じる。Danke shoen OM! パイルの中でPedi局が長々と喋るのは、呼ぶ側からするとあまり感じの良いものではない。と感じているのは私だけか？



< Fig. 6 >

滅多に呼ばれる側になれない、そして呼んでも呼んでも拾ってもらえない私のひがみ根性のあらわれか。とにかく一局でも多くサービスすることが私にここに来た趣意なのだ。出来ることならそのように運用したいという強い思いでこの国に来たのだから、パイルになるほど有難いことはない。今回は紙ログで決めてきたが頁は瞬間にうまっていく。17時35分、ここまでは全てEUの局であったがcondxはやや下がりが気味になる。20mをのぞくが余りにも静かなのですぐ15mにQSYしてCQをだす。待ってましたとばかり瞬時にpile upが始まる。DL3、OK3、IK1、F3、EA3、しかし18時を過ぎる頃にはfade out。下のbandに下がって40mをwatchするがEUがパラパラと聞こえるのみ。そして呼べども呼べどもなかなか応答がない。形としてはきれいに張れたI.V. ant.ではあるが、さすがに多数張られたステーに埋もれるようになっている状態では飛びが悪いのは致しかた無いのだろう。75mも同様で夜間にかけてのlow bandでの運用は苦労しそうだ。

それでも今夜はover nightで頑張ろうとしていた矢先、20時20分、又もや停電となってしまった。仕方無しにシャックの仮眠ベッドで横になる。屋内といえども涼を取る為には入り口のドアも窓も開放しておかなければならない。我々は手に、腰に電池式携帯蚊除けを巻きつけ、床にもやや大きめの蚊取りを幾つも置いているが現地の方は全く気にしている素振りも見せない。一体どうしているのだろうか。彼等に日本から持ってきた渦巻き蚊取りを見せ反応をみた。手に取り匂いをかぎしていたが何だか判らなかつたようだ。しかし、用途を説明し草から作るのだと説明すると、彼等も同様に植物で同じ目的のものを作るのだと話してくれた。あたりが暗くなってから、1人で徹夜覚悟の私を残し、食事の世話をしてくれる女性も

帰宅し、一時、私 1人になったが、夜遅くPoodaさんの甥に当たるといふ青年が泊まりにきてくれた。電気工学の夜間授業を終えてきたと話す好青年で唯一英語の通じる人物である。現地の除虫菊まがいの話は彼がしてくれた。

Over nightで頑張る予定だったこの夜、電気がきたのは翌朝25日の午前6時半に近くなってからであった。いつ電気が来るか気にしながらの睡眠は熟睡ではなかったが、たとえ浅くても睡眠できたことは健康の面では有難いことであった。

冷蔵庫に残された、電気が来ないのだから温蔵庫、昨日の夕食の残り(をほおばりながら20mをのぞいてみた。EUがVK、ZLと盛んにcontactしている。邪魔にならないようにCQを出すもXTからはVK、ZLとはうまくつながらぬ。Beamの方向もあらぬ方向なのだから仕方がないのだが。後日、後方視的にみて、このときもう少し粘ってVKを拾っておけばよかった。何故なら今回の運用でVKが無くWACが完成しなかったからだ。

さてこの時間、17mもまだ開けていないので15mでCQを出す。次第にpile upとなる。EUの中に4X、5B、ZS、A4なども呼んでくるが、XTとの位置関係から言えば何等不思議なことではない。しかし、condxは微妙に変化し、pile upの中にUA9、UA0のprefixが聞かれるようになってきた。細心の注意をはらいながらpileをさばく。07:59,JAでは16:59納得のこの時間に遂にJA1のcallsignを確認、耳をそばだてるにJA1BPAととる。53を送り45が送り返されてきた。Any JA? JA!JA!を連呼するも他に確認することはできなかった。Asiatic Russ.UA9は08:16Zまで入感していた。約2時間30分の送電の後08:55再び停電になってしまった。もてあそばれるように09:40通電、09:45停電、しかしこの僅かの時間に12mでVU2RBIのCQを聞き懸命に呼びcontactすることができた。OpはJH3AEF、J13ZAGのメンバーであることを告げると、何を勘違いしたのかVU移動と勘違いしていたらしく、アフリカからのon airであることを告げると大層驚いた様子であった。

こともあろうに、この日、次に電気が来たのは22:58、朝早くから夜遅くまで一日中停電で、貴重な一日をどうすることもできなかった。

また25日(土)はCQ WPX contestが始まりWARC band以外での運用は非常にやりづらくなった。22:58に通電が始まったものの開けている75,40,15の各バンドではcontestのため実績が上がらないまま02:25、約3.5時間の通電の後、再び停電してしまった。しかし、この間、75m,40m bandでは、丁度JAでは早朝でDX timeにも当たる時間帯である。75m bandはやや遅すぎる感じがしないでもなかったがJA4のbig gun、5や0の常連DXerの信号を捜したが聞くことはできなかった。充分高い確率で信号を聞ける筈だったのに残念。時間がほんの少し遅すぎた。続いて40m bandの上のほうをwatchしてみても驚いた。JA1,6,13の局のround QSOが完全に了解できる状態で入感している。特にJA1の局はPWも入っているのであろう。Sメーターが大きく振れている。思わずBKを入れるも全く気付かぬ様子。それならとAF、AFをことさら強調するも結果は同じこと。聞いて知らんふりをするほど人の悪そうな連中でもなさそうなのに。またまた「ひがみ」が出てしまいました。失礼。次に電気が来たのは26日06:02であった。停電、停電であたふたしているうちに、今日はもう帰国の日になってしまった。とにかく電気が来ているかぎり、空港に向け出発するまで頑張らなければ。

06:02の通電当初、開けている15m bandで運用を開始したが、contestのため効率上がらず。午前10時前から17m bandが次第に開け始めたためQSYする。11:17 JH4ADVを皮切りに12:31(21:31 JA time)までの間に7局のJA局とcontactを果たすことができた。

Contest中も快調に進んだ17m bandであったが、13:30に再度停電となり、次に通電したのは15:48分。今夜の便に乗るとなると少なくとも18:00頃にはQRTして食事もしなければならぬし、荷物の取りまとめもしなければならぬ。ただ、残留組もいるので完全撤収の用意まではしなくてもよくて助かった。

今日は午前早くから17m bandで頑張ってきた。WARC band以外はcontestでごったがえしている。そこで、ラストパートは12m bandで締めくくるとした。Band condxも丁度high bandに移りつつあった。Bandがopenしてしばらくは当然のようにEUがpile upをなしたがその中にW6の信号を確認した。南北アメリカ大陸がどちらから開けていくのか定かではなかったが、恐らく北から南に向け開けていったように感じた。すなわち、呼び続けるEUの中から次に拾い上げたのはW4、FM5、KP4そしてPY、LUと。17:20 30にかけJE1のprefixを聞いたがsuffixの確認には至らなかった。続いて9M6とcontactしたので、condxの変化としては納得のできる結果となった。南北米大陸は地理的にはAFからも比較的近く、弱いながらも相当長時間にわたり入感しており、18:11のK8との記録が残っている。その割にcontactが少ないのはEUの壁によるところであろう。予定を15分超過し、促されて18:15分にmicをおいた。

運用に呈した時間は3日間、停電の時間を加味するとHF帯運用に供した時間は36時間50分、XT2AEFのHF帯でのcontact数は581、

contact entity数は56であった。詳しくは別表に示した。

停電には苦しみられどうしのon airであったが、私としては実に充実して楽しいon airであった。XT2という見も知らぬAFのrare entityから正式にon airできるということは、熱砂の環境も、黄熱病にマラリアの危険因子も、全く不便な水事情も、食べ慣れない食事情も、言葉の問題も、政治情勢の不安定さも、何があつたにせよ私を押し留めることのできない強烈な魅力であった。

国難とも言うべき大震災、津波被害、原発事故が発生した最中での行動であり、如何にもアマチュア無線活動ですと予告できる環境にはなく、対外的には何の予告もせず、支援もなく実施したXT2行であった。とてもPEDIといえる装備や構成ではなかったが精一杯頑張ったという達成感だけは充分に感じ取ることができた。今もその余韻は体中に心地よく残っている。夢よもう一度は欲張り過ぎであろうか。

稿を終わるにあたり、またとないこの機会をお与えいただき、あらゆる困難な外交折衝を望むままに叶えていただいた関西学院大学総合政策学部教授、J13ZAG会員、JA3VWT中野幸紀教授に、そしてまたXT2での我々のアマチュア無線活動に公私共に無類なきご援助を賜った同国アマチュア無線連盟会長Hugolin Pooda氏と彼の会社のスタッフ達に、また現地での設営、運用に幅広くご協力いただいたJL3YJF関西学院大学ラジオクラブ会員、JO3VVO仲田周祐、JO3XYZ西尾実の両氏に心より感謝を申し上げる次第であります。

結果報告

XT2AEFのHF帯での 総contact数 581 総entity数 57
 QSOは全てPHONE (私のCW技術ではPHONEの方が遥かに効率が良い)

BANDごとのcontact数

75m=2 40=6 30=0 20=4 17=239 15=142 12=188 10=0

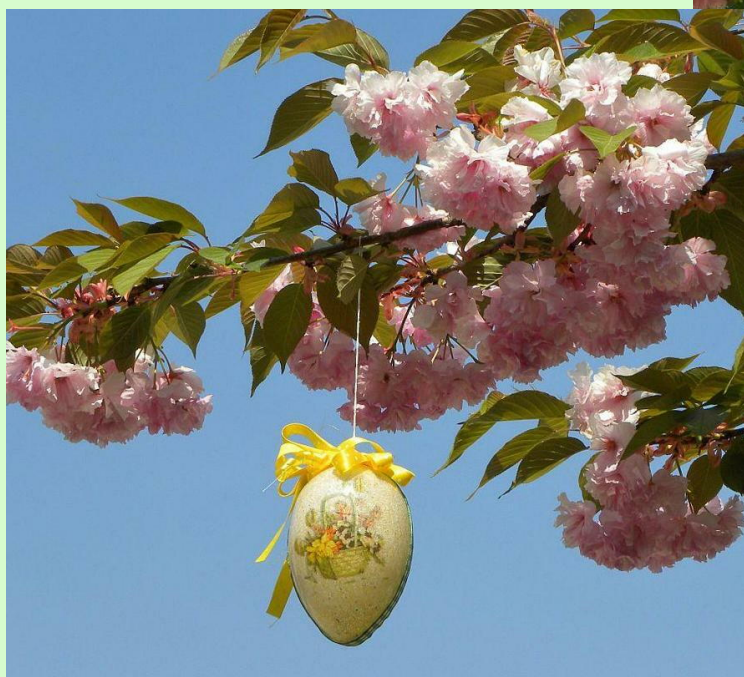
各entity毎のcontact数

I	97	HB9	7	ZS	2
DJ	61	OM	7	4X	1
U(E)	39	YU	7	9M	1
UR	36	EA8	6	A4	1
SP	33	HA	6	A7	1
F	26	KP4	6	CU	1
G	24	LA	6	E7	1
EA	23	PY	6	FM	1
OK	20	SM	6	GM	1
SV	17	CT	5	HB0	1
W	13	ES	5	HZ	1
JA	12	S6	5	LY	1
ON	11	EA6	4	LZ	1
OE	11	GI	3	UN	1
U(AS)	11	GW	3	TK	1
OH	9	LU	3	XE	1
OZ	9	YO	3	YB	1
9A	8	YV	3	YL	1
PA	8	5B	2	VU	1



(編集者追補 : ブルキナファソ国旗、地図)

季節の写真



今年のイースター (復活祭) は遅く4月の下旬
 満開の桜につるされたイースターの卵
 (オーストリア南部地方)